

夜這いをかけた訳あり令嬢は

辺境伯の淫らな愛で逆襲される

私は意を決して大きな扉をコンコンと叩き、返事を待たずにずりりと中に入りこんだ。
「クレイグか？ 何かあったのか」

暗い室内から響く低い声には、昼間に聞いた時と同じ張りがある。

寝ようと寝台に入ったが、まだ眠りに落ちてはいないというところだったのだろう。
私としては好都合。

「クレイグ？」

「私です。エメラインです。クレイグではございません」

そう声をかけると、寝台の上の人物がガバツと跳ね起きる気配がした。

ここはホールデン王国の南端、アボットを治めるマクドゥーガル辺境伯家の屋敷の主寝室だ。

そして、寝台の上にいるのは、ダスティン・マクドゥーガル辺境伯様。

昨日結婚したばかりの、私の旦那様だ。

彼が寝台の脇のテーブルに置かれていた魔法ランプに灯り^{あか}をとすのと同時に、私は羽織っていたガウンを床に落とし、薄い寝衣一枚の姿になった。

「な……エメライン嬢!? ここで何をしている!?」

「それは愚問というものですわ」

この状況で、他に何があるというのか。

ふふふ、と笑いながら寝台に乗り上げる私を、辺境伯様は化け物を見るような目で見ている。

「ま、待ってくれ! これはお試しの結婚だと、きみが言ったのではないか! こんなことをする必要はないだろう!」

「そうです。お試しの結婚です。だからこそ、ねやじこ聞事も試してみなくては」

「なぜそうなる!? 俺はそんなつもりで引き受けたのではない!」

「では、白い結婚を望まれると?」

「当然ではないか! きみは若く美しいのだから、俺と別れたらすぐに良縁に恵まれるに決まっている」

「まあ! 私を美しいと思ってくださいね! それなら、なおのこと。どうぞ遠慮なく抱いてくださいませ」

「だから、なぜそうなるのだ!」

「だって、考えてみてください。もし私たちの結婚が白いままだあの王太子殿下に知られたら、私はまた別の方に無理矢理嫁がされるかもしれませんわ。私たちへの嫌がらせのために、ぎんじ御璽まで持ち出すような考えなしですもの。そういうこともあり得ると思いませんか?」

私が切々と訴えると、彼は凜々しい眉根を寄せて、口をつぐんだ。

きつと同意してくれているのだろう。

「と、いうのは建前です。本当は……ただ単純に、辺境伯様に抱いてほしいのです。だって私……ずっと前から、辺境伯様をお慕いしておりましたから」

「俺を慕って……? きみのような、王都育ちの令嬢が? 嘘だろう?」

本心から言っているのに、辺境伯様は全く信じてくれない。

だが、そんなことも想定内。

ここまで来て引き下がるつもりはない。

「嘘など申し上げません」

「だが……きみは俺のことなんか、何も知らないだろう。それに、俺はこんな容姿だ。令嬢に好かれるはずがない」

「辺境伯様は、王太子殿下におとし貶められた私を守ろうとしてくださったではありませんか。今までそんな方は誰もいませんでした。それだけでも、お慕いする理由には十分ですわ」

彼がまた眉を寄せた。

私が日常的に貶められていた、というのがわかったからだろう。

やっぱり優しい方だ。

「それから、辺境伯様の容姿ですけど、私はとても素敵だと思えます」

「はあ!? そんなはずない!」

「私の好みは、王都の一般的な令嬢から外れているのは自覚しております。私は、辺境伯様のよう

な遅い方が好きなのです」

基本的に、王都では細身できれいな顔をした優男がモテる。

それこそ、あの王太子殿下のような。

「だが、俺の肌はこんなだし、顔だけでなく体にも傷痕があるんだぞ」

辺境伯様のお母様は、南方の国出身の異国人だった。

だから、彼はこの国では珍しい褐色の肌をしているのだ。

「肌の色など気になりません。むしろ、精悍せいこんで好ましいと思います。お顔の傷も、先の戦役の時に負われたものでしょう？ 名誉の傷ではありませんか。辺境伯様の何もかもが、私の好みにぴったりなのです」

私は彼のこめかみから左頬にかけてはしる傷痕にそつと指先で触れた。

こんな傷が、きつと服で隠れているところにもたくさんあるのだろう。

この国を、人々の生活を守るために勇敢に戦って、その折にできた傷なのだ。

武人の勲章のようなものではないか。

辺境伯様は王都の令嬢にはモテないのだろうが、普通の令嬢ではない私には垂涎すいげんもののいい男だ。触れたくて触れてほしくて、昨日からずつとうずうずしていた。

「本気で言っているのか……？」

「どこまでも本気です。言葉を尽くしても信じられないとおっしゃるのなら、行動で証明いたしましょう」

「どうやって……って、待て！ やめろ！」

私は彼ににじり寄ると、その体を包む寝衣のボタンを素早く外した。

露わになった逞しい胸板に、私はほうと溜息をついた。

ああ、ほしい。この男がほしくてしかたがない。

彼も、口ではやめろと言いながら私の手を払いのけたりはしない。

褐色の頬はわずかに赤くなり、ゴクリと生唾を飲み込む音が聞こえた。

そして、彼の榛色はだいろの瞳が食い入るように見つめているのは……私の胸元だ。

いける。もう一息だ。

私は心の中でほくそ笑んだ。

彼の寝衣のボタンを全て外し、前を完全に開けさせたところで、鎖骨のあたりに頬をくつつけて縫りついた。

温かな体温と、早鐘のような鼓動と、雌としての私の本能を呼び起こすようないい匂い。

ああ、堪らない……

私は辺境伯様の首筋にちゅつとキスをして、自分の胸を硬い胸筋に押しつけた。

「お願いです、辺境伯様……私を、抱いてください……」

ゴクリ、と生唾を飲みこむ音が再び聞こえた。

鋼のような筋肉が盛り上がった腕が、躊躇ためちいがちに私の体に回され、そつと抱きしめられた。

「ほ……本当に、いいんだな……？」

「はい……今夜、私を妻にしてください」
直後、私の唇は噛みつくような口づけで塞がれた。



『茨姫』 エメライン・アシュビー！ おまえとの婚約を破棄する！」

そう高らかに宣言し、私にピシッと人差し指を突きつけた青年の名は、アルバート・ホールデン。このホールデン王国の王太子殿下で、輝く銀髪とアメジストの瞳をした、すらりと長身の美青年だ。

対する私は、アシュビー侯爵家の長女エメライン・アシュビー。

豊かな金髪を縦ロールにセットし、大きな碧の瞳は吊り目を強調するような化粧で彩って、真っ赤で派手なドレスを身にまとっている。

化粧もドレスも似合っているのだが、どこをとってもキツイ印象で、可愛らしさは欠片もないという装いだ。

「あらあら殿下ったら。相変わらず冗談が下手でいらっしゃるのね」

私はつんと顎を反らし、ドレスと同じ色に塗られた唇を歪め、せせら笑って見せた。

このキツイ容姿と同じくらいキツイ言動から、私はいつからか『茨姫』と呼ばれるようになった。私たちの婚約は、私が五歳、アルバート殿下が六歳の時に王命により結ばれたものだ。

半年後の彼の二十歳の誕生日に行われる結婚式に向けて、現在着々と準備が進められている。それを、今さらひっくり返すというのか。

私は震える拳をぎゅっと握りしめた。

「可愛げがないのいい加減にしろ！ こんなところで冗談を言うわけがないだろう！」

そうでしょうね。どこまでも本気なのでしょうね。

だって、今は王家主催の夜会の真っ最中なのだ。

私たちの険悪なやりとりを、きれいに着飾った多数の貴族たちが遠巻きに眺めてヒソヒソしている。

長年婚約している私たちが、良好な関係ではないということは有名だ。

婚約した当初から、アルバート殿下は私を性格が悪い生意気な女だと公言し、私のほうもだからなんだと開き直り、一切媚びるような態度はとらなかった。

直接罵られたりもしたが、私はそれをどこ吹く風で聞き流すか、さっきのようにせせら笑うかのどちらかで返し続けた。

そんなわけで、私たちの仲は悪くなる一方だったのだ。

「私と婚約破棄すると、我が家の後ろ盾を失うことはご存じなのでしょうね？」

アシュビー侯爵家は建国当初からの歴史ある名家だ。

領地に良質な鉱山を有しており、経済的にも豊かであるだけでなく、侯爵家当主である私の父は古書の蒐集家で、趣味には熱心だが野心は薄い。

そういう意味でも都合がいいと、彼の婚約者に私が選ばれたのだが。

「もちろんだ。おまえの家の後ろ盾など、最初から必要なかったのだ！」

彼がここまで強気なのは、他に王位を継ぐことができる子がいなかったからだ。

国王夫妻はおしどり夫婦で、子を一人しか授からなかったにもかかわらず、国王陛下は側妃を召さなかった。

夫婦仲がいいのは結構なことだが、その結果コレが次期国王に決定してしまったのだから、私たちを取り巻いている貴族の半分以上が暗澹とした顔をしているのも無理はない。

そんな様子にも気づかず得意気にふんぞり返っているアルバート殿下の後ろで、私の義弟ブライアンがニヤニヤ笑いながらこちらを見ている。

大嫌いな姉が貶められているのが楽しいのだろう。

一人娘の私が王家に嫁ぐことになったので、跡継ぎにするため親戚筋から引き取られ養子となったのがブライアンだ。

彼と私は、ほとんど血が繋がっていない義理の姉弟なのだ。

侯爵家に来てすぐのころは私に懐いていたのに、ある時から突然嫌われるようになってしまった。可愛がっていた私としては残念に思ったが、私を嫌う義弟に関わる暇はないと放置して今に至る。

「まあ、そうでしたの。殿下がそうおっしゃるのでしたら、私としては従うしかありませんわ。後で泣きついてきたりしないでくださいね？」

「誰がそんなことをするか！ おまえのそういう、口が減らないところが昔から大嫌いだったの

だ！」

「あら偶然ですわね。私も、昔から殿下が大嫌いでしたのよ。おそろいで結構なことですわ」

ほほほ、とまた笑ってみせると、こういうわけかアルバート殿下は驚いたような、傷ついたような顔をした。

なぜだろう？

まさか、私に慕われているとも思っていたのだろうか。

今までの私に対する自分の行動を振り返ってみれば、慕われる要素など皆無だとわかるだろうに。いや、彼のことだから、私に嫌われているとまでは思っていなかったのだろうな。

きっと彼には、誰かからはつきりと嫌われた経験がないのだ。

とにかく、私たちはお互いに嫌い合っているのが衆人環視の中で確認された。

ここで彼の嫌いなところを列挙することもできるが、さすがにそこまですると不敬罪となるかもしれないので我慢だ。

「では、私たちの婚約は破棄でよろしいのですね？」

「ああ、さつきからそう言っているだろう。正式な書類も準備してある」

アルバート殿下が合図をすると、側近の一人が恭しくトレイトレイを掲げて歩み寄ってきた。

トレイの上には、書類とペンとインクがある。

手にとってみると、確かに私たちの婚約破棄に同意する書類で、すでに彼の署名は済んでいる状態だ。

私もその横に署名をすればいいのだが、それだけでは婚約破棄は完了しない。

「何をグズグズしている！ さっさと署名をしろ！ もしかして、怖気づいたのか？ ここで私に土下座して泣きつくなら、撤回してやらんでもないぞ」

嗜虐的に笑う彼に、私は冷めた目を向けた。

「怖気づいたわけではありません。この書類の様式だと、私たちだけではなく国王陛下の署名も必要なのですが、それはどうなさるのですか」

「もちろん、それも抜かりはない」

彼は懷から何やら取り出し、得意気に掲げて見せた。

「それはまさか……御璽ですか!?」

アルバート殿下の手の中で輝いているのは、黄金に色とりどりの宝石が埋め込まれた、手のひらに載るくらいの大きさの判子だ。

国王陛下が管理しているはずのもので、芸術的価値からもホールデン王国の至宝の一つとされている。

そんなものを、どうにかして持ち出してきたらしい。

いくら王太子殿下とはいえ、これは暴挙としか言いようがない。

それだけ私との婚約が嫌だったのだろうが、考えが浅すぎる。

あまりのことに呆れを通り越して眩暈がするような気分になったのは私だけではないらしく、夜の会場はざわざわと騒がしくなった。

「これがあれば、父上の署名などなくても婚約破棄は成立する！」

御璽とは本来、国王陛下が勅命を下す時に使われるものだ。

その押印は、ホールデン国王の署名と同じ効力を持つとされている。

「……まあ、そうですね。わかりました。署名いたします」

きつとあとで大問題になるだろうが、私の知ったことではない。

私がさらさらと署名をして、アルバート殿下が二人分の署名の下に御璽を押しつけると、ホールデン王家の色である紫色で王家の紋章が書類に印された。

「私、ホールデン王国王太子アルバート・ホールデンと、『茨姫』エメライン・アシュビーの婚約は正式に破棄された！ ここにいる皆がその証人だ！」

証人というか、目撃者というか。

巻き込まれた人々からしたら、迷惑極まりない。

嬉しそうに書類を掲げる彼を見て、私は再び震える拳をぎゅつと握りしめ、俯いた。

この震えは、怒りや悲しみから来るものではない。

心の底から湧き上がる歓喜に、今にも飛び上がってしまいそうなのを必死で堪えているからだ。だって。

私はずっと、この婚約を破棄に持ち込むために密かに頑張ってきたのだ。

心の中で渾身のガッツポーズをとりながらも、私は途方に暮れた演技を続けた。

さっさとこの茶番劇から退場するためには、私を貶めるのが大好きな元婚約者様が満足するよう

にふるまうほうがいいと、経験上よく知っているからだ。

「……では、私はもう用済みですね。御前を失礼いたします、王太子殿下」

「待て、エメライン」

俯いたままカーテシーをして立ち去ろうとした私を、彼は呼び止めた。

「おまえは可愛くはないが、長い間私の婚約者として務めてくれた。このままおまえを放り出すのは、慈悲深い私としては忍びない」

アルバート殿下はそう言つて、ニヤリと厭らしく笑う。

そんな顔をしては、せっかくの王妃殿下譲りの美貌が台無しだ。

無視して踵を返すわけにもいかず、私は内心で舌打ちをした。

「ありがたく思え。おまえには、新たな縁談を用意してやったぞ！」

これには私もぎよつとした。

せっかく婚約破棄が成立したというのに、新たな縁談だと!?

どう考えても条件のいい縁談なわけがない。

私を奴隷のように売り飛ばすつもりなのだろうか。

「……いったい、どなたとの縁談なのです」

「おまえも知っているだろう。ダスティン・マクドゥーガル辺境伯だ！」

あまりのことに、私は息を呑んだ。

マクドゥーガル辺境伯様といえば、グリフォン騎士団を率いて先の戦役で多大な武勲^{ぶくん}をあげた英

雄ではないか！

「どこにいる、マクドゥーガル！ 出てこい！」

ざっと人垣が割れて、その先に騎士の正装を纏^{まと}った長身の男性の姿が見えた。

短く刈りこまれた黒髪。遠目にもわかる褐色の肌と逞^{たくま}しい体躯。

間違いない辺境伯様本人だ。

まさか、この夜会に彼が参加しているとは思わなかった。

領地が遠方にあり、また、社交が苦手だということで、彼がこういった場に現れるのは稀なのだ。

彼は戸惑いの表情を浮かべながらも、洪々といった様子で私たちに歩み寄ってきた。

「マクドゥーガルよ。おまえに、この『茨姫』を下賜^かしてやろう。感謝するがいい！」

婚約破棄された以上、私はもうアルバート殿下のものではない。

自分のものではないものを、下賜なんてできないだろうに。

「……王太子殿下。ご冗談が過ぎます」

低く張りのある、いかにも武人らしい声に、私は先ほどとは違う意味でまた震えた。

「冗談ではない。おまえが妻と死別したのも、もう何年も前のことだ。この女は可愛げはなくとも、まだ若く健康だぞ。婚約破棄され瑕疵^{かし}がついた以上、新たな良縁など望めないだろう。後妻にして子を生ませるにはちょうどいいではないか」

いつもながら、酷い言いようだ。

私に瑕疵をつけたのは、自分自身だというのに。

「お言葉ですが、私にはもう息子がおります。後妻を娶る必要もなければ、そのつもりもございません」

辺境伯様は、私のちょうど十歳年上だ。

先の戦役の直前に結婚し、戦場にいる間に子が生まれたが、それからすぐに奥様は儂くなつたと聞いている。

「息子は一人数だけなのだろうか？ 辺境伯家がそれでは心許ないと、父上も前から気にしていました」

どの口が言うのか、とおそらく会場にいる全ての人々が思った。

辺境伯様はちらりと私に視線を向けた。

精悍な顔立ちを彩る榛色の瞳がはつきりと見えて、私の心臓は大きく跳ねた。

こんなにも間近で彼に接するのは初めてだった。

これだけ近くと、彼の顔の左側にある傷痕までよく見える。

優美なものが優れているとされるホールデン王国では、彼のように逞しく精悍な容姿は好まれない。

褐色肌に加えて顔に傷まである彼は、一般的な令嬢や令息たちには直視できないほど恐ろしく映るのだそうだ。

私からすれば、あれくらいの傷痕で大袈裟だとは思えないのだが。

「だとしても、何もこちらのご令嬢でなくてもいいでしょう」

「なんだ、おまえでも『茨姫』を娶るのは嫌なのか」

「そういうことを言っているではありません。婚約破棄したばかりだというのに、私のような年上の男やめと無理矢理結婚させるなど、あまりにも酷ではありませんか」

「貴族の結婚はそういったものだ。個人の感情など必要ない」

「それはそうだが」

「エメラインは、おまえのような醜い男相手でも文句を言える立場ではなくなったのだ。おまえからしても都合がいいではないか」

辺境伯様の凛々しい眉がわずかに寄せられた。

面と向かつて『醜い』と言われたのだから、当然だろう。

「しかし……いくらなんでも、ご令嬢が気の毒です」

おや、と思った。

これだけ自身も蔑まれているというのに、まだ私を気遣ってくれている。

結婚を押し付けられるのを避けるために言っているのだとしても、嬉しくなってしまう。

「なら、こうしようか。もしおまえがエメラインを娶らないというなら、ケイロン皇国の後宮に送ることにする。それでも断るか？」

ケイロン皇国というのは、ホールデンの隣国のさらに隣の国だ。

代々皇帝が好色であることが知られており、後宮には常に多数の美女がそろえられているのだそうだ。

アルバート殿下のことだから、きっと私を後宮入りさせるための書類も準備してあるのだろう。そこに御璽が押されたら、私はこの場で捕らえられ明日にはケイロンに送られるに違いない。

アルバート殿下は、こういう悪知恵だけはよく働くのだ。
私が絶るような目を向けると、辺境伯様も険しい顔をしてこちらを見ていて、私たちの視線がぶつかった。

体が硬直して動けない。

息が止まってしまいそう。

先に視線を逸らしたのは、彼のほうだった。

「……はあ、しかたがない……わかりました。こちらのご令嬢を娶ります」

「よく言った！ では、これに署名を」

新たに取り出されたのは、婚姻申請書だった。

辺境伯様は諦めた顔でさつと署名をして、大きな手に握られたペンを私に差し出した。

私はなんとか手を動かしてそれを受け取り、署名をした。

手が震えていたから、婚約破棄の書類に記入した署名と比べると字はガタガタになってしまった。

アルバート殿下は満足気に御璽を押し、こうして私と辺境伯様の婚姻があつさりと成立した。

本来なら、私の婚姻の手続きには父であるアシュビー侯爵の承認が必要なのに、御璽があればこんな無茶なこともできてしまうのだ。

「はははは、野蛮で醜い辺境伯と『茨姫』、いかにもお似合いではないか！ 父上もお喜びになる

だろう。皆、ここに新たに誕生した夫婦に祝福の拍手を！」

呆れや失望の視線を人々から向けられているのにも気づかず、アルバート殿下はご満悦だ。

一方、私たちには同情の視線が集まっている。

ぱらぱらと拍手の音が響く中、まだ立ち尽くしている私の前に、大きな手が差し出された。

見上げると、私を見下ろしている様色の瞳と視線がぶつかった。

この夜会で、アルバート殿下に婚約破棄されるのは、事前にわかっていた。

だが、まさかその直後に辺境伯様と強制的に結婚させられることまでは予想できていなかった。

私は、さつきまで大嫌いだっただけ元婚約者が少しだけ好きになった。

だって、この結婚は私からしたら極上のご褒美なのだから！

私は爆発しそうなほど高鳴る鼓動に胸を押さえながら、そつとその大きな手をとったのだった。



「きみが王都に残っていたら、また王太子殿下に何かされるかもしれない。このまま俺と一緒にアボットに行くのが一番だと思う。だがもちろん、無理にとは言わない。アボットは王都から遠く離れた辺境の地だ。家に帰りたいというのなら、引き止めはしないよ」

アボットというのは、ホールデン王国の南端にある辺境伯様の領地のことだ。

隣国バンクス王国との国境と接しており、バンクスとホールデンの王都を結ぶ大きな街道が通つ

ている。

どうしたい？ と選択肢を示してくれた辺境伯様だが、私の答えは決まっている。

「アボットに、連れて行ってくださいませ」

「……本当に、それでいいのか？」

「はい、お願いします。家に帰る必要はありません」

私の手を引きながら、彼は私の歩幅に合わせて歩いてくれている。

無骨な容姿に反して、こういう気遣いができる方なのだ。

私、本当にこんなに素敵な方と結婚したの？

夢を見てるんじゃない？

だとしても、なんて幸せな夢……このまま覚めなければいいのに……

迷いのない足取りで歩く辺境伯様に、私はぼーっとなりながらふわふわした気持ちでついていった。

そして、足を止めたのは大きな厩舎の前だった。

「あれ？ 早かったですね？ もう夜会は終わつたんですか？」

声をかけてきたのは、騎士服を着た辺境伯様と同じ年頃の男性だ。おそらく部下なのだろう。

「夜会はどうか知らないが、用は済んだ。さっさと帰るぞ」

「そちらのご令嬢は？」

「……アボットに連れて帰ることになった」

「えええ!? なんで!? 嘘でしょう!？」

「嘘ではない。事情はあとで説明する。ロニーたちの準備はできているか」

「はい、いつでも飛べますよ。ですが、その、ご令嬢は……」

「わかってる。ロニーは俺が説得するから、連れてきてくれ」

「はあ、わかりましたよ」

部下と思しき男性は頭を掻きながら厩舎の中に入って行った。

「エメライン嬢、といったか」

「は……はい」

ふいに名を呼ばれ、私の心臓がまた跳ねた。

「グリフォンを見たことはあるか」

「はい……遠くからですが」

辺境伯様はグリフォンに乗って王都と領地を行き来すると聞いている。

今日もそれは同じはずだ。

ということとは……私もこれからグリフォンに乗るのね!？」

今夜は裾の膨らみが控え目で、いざとなったら走れるドレスを選んだのだが、それで正解だったようだ。

先ほどの男性が厩舎から出てきて、その後ろから馬の二倍くらいはある大きな獣がのっそりと現れた。

「これが俺のグリフォンだ。ロニーという」

グリフォンというのは、上半身が鷲^わ、下半身は獅子の姿をした魔法生物だ。

ロニーと呼ばれたグリフォンは、首から上は白い羽毛、肩、胸部、前脚は黒い羽毛に覆われ、下半身の獅子の部分はこげ茶色をしている。

前脚には鋭い爪があり、後脚は強靱な筋肉が盛り上がっているのが見える。

そして、何よりの特徴は、大きな黒い翼。

この翼でグリフォンは空を駆け、戦場では背に乗せた騎士と一体となって暴れまわり、敵を引き裂くのだ。

知識としては知っているが、こんなにも近くでグリフォンを見るのは初めてだ。

なんてきれいな生き物なんだろう。

ロニーは金色の瞳を辺境伯様の隣に立っている私に向け、首を傾げた。

その仕草は、誰？ と問いかけているようで、なんとも可愛らしい。

賢そうな瞳に知性を感じられるからか、こんなに大きな獣なのに少しも怖くない。

「俺の客人のエメライン嬢だ。背中に乗せてくれるか」

ロニーはぱちぱちと瞬きをして、顔を私に近づけてふんふんと匂いを嗅いだ。

グリフォンは、嗅覚で人間が敵意を持っているかどうかを判別すると本に書いてあった。

動かず騒がずじっとしていると、検分するように鋭く大きな嘴^{くちばし}でちゃんと私の腕をつつき、

金髪縦ロールを一房いくいと引っ張った。

私を傷つけないように、慎重に力の加減をしてくれているのがわかる。

抵抗せずに好きなようにさせていると、ロニーはふいと横を向いて地面に伏せた。

「ほう、驚いたな。どうやらきみを気に入ったらしい」

なるほど、これは背中に乗れ、という意味なのか。

ロニーは私を認めてくれたようだ。

なんと光栄なことだろう！ すごく嬉しい！

「失礼」

辺境伯様はそう短く告げると、私を軽々と抱え上げてロニーの背に取り付けられた鞍^{くら}の上にそつと下ろした。

突然のことに声も出せず、されるがままになっていた私は、次の瞬間、ガチッと硬直した。

だって、彼も同じ鞍に跨り、私をその逞しい胸に抱き寄せたのだ。

それだけでも鼻血が出そうなくらい大興奮だというのに、まだ終わりではなかった。

（ふおおおおおおお！）

肩にかけていたマントを広げ、私を頭からすっぽりと包みこんでくれた彼に、私は声を出さずに

心の中で大絶叫した。

ナニコレ!?

心臓が爆発しそうなんですけど！

この人、私を殺そうとしてるの!?

「アボットまでは数刻かかる。そのまま大人しくしてしてくれるか」

低い声には優しさと労りが満ちていて、私は歓喜に震えながらマントの下で小さく頷いた。
温かい……いい匂いがする……

誘われるように分厚い胸板に頬を埋めると、力強い鼓動が聞こえた。

ああ、本当に鼻血が出ちゃいそう……

「では、出発するぞ。ロニー、頼む！」

一度ぐつと体を沈めたロニーは、大きく上へと跳躍した。

バサバサと羽ばたく音が聞こえて、マントに包まれているので外は見えないが、ぐんぐんと高度が上がっていくのを感じる。

さすがに少し怖くて、とっさにしがみついた私を、辺境伯様は片手でまた抱き寄せてくれた。

「大丈夫だ。決して落とすはしない。疲れているようなら、眠っていてもいいからな」

そう言われて、私はやっと自分がくたくたに疲れているのに気がついた。

ここ数日はいろいろと大忙しで、昨夜もほとんど眠る時間がなかったのだ。

彼は英雄として有名だが、直接言葉を交わしたのは今日が初めてだ。

それなのに、こうして身を任せるのに欠片の不安もないのだから自分でも不思議に思う。

もつとこの状況を堪能したいという気持ちもあったが、彼の体温と優しさに包まれ、いい匂いを嗅いでいるうちに、だんだん瞼が下がってきた。

私は眠気に逆らわず、幸せな気分で目を閉じた。



アボットにある辺境伯様の屋敷に着いたのは、深夜になってからだった。

「おかえりなさいませ……そちらのご令嬢は」

出迎えてくれた家令だと思われる初老の使用人は、私を見て目を丸くした。

「エメライン嬢だ。いろいろとあって、俺が保護することになった。詳しくは明日説明するから、客人として丁重にもてなしてくれ」

「かしこまりました」

さつきまで私を包んでいたマントを受け取りながら、家令は頭を下げた。それから、背後に控えていた使用人に迷いなく指示を飛ばし始める。

「エメライン嬢。今夜はもう遅い。これからのことは、明日以降に話し合うでしょう。王都からこんな田舎に連れてきてしまったが、この屋敷には女性に無体を働くような者はいない。安心して休むといい」

私は辺境伯様の胸に寄りかかりぐつすり眠ったので元氣だが、他の人たちはそうではない。

特に、王都とアボットをグリフォンに乗って往復した彼は疲れているはずだ。

「そうさせていただきます。お気遣いありがとうございます、辺境伯様」

私が素直に礼を言うと、周りの人たちは少しほっとしたような顔をした。

我儘を言って面倒をかけるつもりはないが、今の私は派手なドレスに身を包んでいて、見るからに刺々しい『茨姫』なのだ。

警戒されるのも当然だと自覚している。

私は辺境伯様に就寝の挨拶をして、案内してくれるという年嵩のメイドに大人しくついていった。「こちらのお部屋になります。申し訳ございません、何分急なことで、若いご令嬢をお迎えする準備がありませんので……」

「わかってるわ。謝らないといけないのは私のほうよ。突然お邪魔してしまつてごめんなさいね」

連れて行かれたのは、淡い色合いの壁紙や家具できちんと整えられている客室だった。

落ち着いた雰囲気、居心地よさそうな印象だ。地味と言えなくもないが、何も問題はない。

突然の珍客には十分すぎるくらいの部屋だと思う。

「ええと、まずはお風呂に入つてさっぱりしたいわ。ドレスを脱ぐのだけ手伝ってくれる？ あとは自分でできるから」

「かしこまりました。では、入浴なさっている間に、寝衣になりそうなものを探してまいります」

「ありがとう。とりあえず着られれば、なんでもいいわ。男物のシャツとかでも構わないわよ」

むしろ、辺境伯様のシャツを持ってきたら、とても嬉しいのだけど。なんてことを思ったりはしたが、口には出さなかった。

私はアクセサリーを全て外し、重いドレスも脱いで身軽になつてから、浴室に入った。

体用と髪用の、新品の石鹸が一つずつ備え付けてある。

化粧落としもあるが、これだけ新品でないのは、おそらくさっきのメイドの私物なのだろう。もちろん、文句を言うつもりはない。

むしろ、申し訳ない。

お風呂から上がると、脱衣所に寝衣が置かれていた。

これも新品ではないが、手触りが良い絹製だ。

庶民が着るようなものではないので、きつと辺境伯様の亡くなられた奥様のものだろう。

これはこれでまた申し訳ないが、ありがたく使わせてもらうことにした。

浴室から出ると、さっきのメイドが控えていて、すっぴんになった私を見て驚いた顔をした。

そうだろうね。驚くよね。

テーブルの上には、ティーセットとサンドイッチが載せられた皿がある。

それから、これまた新品ではない化粧水の瓶が控え目に置いてあった。

「ありがとう。この化粧水、あなたの私物なのではなくて？」

「……さようでございます。こんなものでもないよりはマシかと思い、お持ちしました」

「とてもありがたいわ。気を遣わせてしまつてごめんなさいね。あとで新しいものを買つて返すわね」

化粧落としも化粧水も、私が普段使っているのとは違い庶民向けの安価なものだが、用意してくれただけでとてもありがたい。

「それから、お茶とサンドイッチもありがとう。昼から何も食べていなくて、お腹が空いているの」

化粧水を肌に塗り、食事を胃の中に収めると、やっと心地つくことができた。メイドは空になった皿などを手押しカートに載せ、一礼をして去っていった。

一人になった私は、寝台に潜りこんで大きく息をついた。

激動の一日が、やっと終わった。

今日だけで一生分の運を使い果たした気がする。

明日には私は死んでしまうのではないだろうか。

そうなくてもおかしくないくらいいの、予想外なご褒美展開となった。

私は辺境伯様のマントの中にいた時の感触を思い出し、赤くなった頬を押さえながら寝台の上をゴロゴロと転がった。

強く逞しいだけでなく、私を優しく気遣ってくれた辺境伯様。

何を隠そう、彼は私の初恋の君なのだ。

叶うはずがないと諦めていた恋心が、私の中で真つ赤な炎となって燃え上がっている。

大好き。

私は、どうしようもなく完全に恋に落ちてしまった。

だからこそ。

彼にも、私を好きになってほしい。

嫌がらせで無理矢理押しつけられた結婚だが、逆に幸運だったと思えるような関係を築きたい。

アルバート殿下との婚約破棄という一つの大きな目標を達成した私に、新たな目標ができた。

辺境伯様を、絶対に落とすのだ！

そのためにも、今夜はぐっすり眠らなくては。

明日、寝不足の顔を彼の前に晒すのは避けたい。

私は目を閉じ、眠りについた。



翌朝起きて顔を洗っていると、昨夜のメイドがドレスや化粧品などを持ってきてくれた。

深緑色のデイドレスは、私が昨日着ていた夜会用の派手な赤いドレスとは違い、コルセットで腹部を締めつける必要もなく、シンプルで動きやすそうなデザインになっている。

きつと、私の髪と瞳の色にあわせて選んでくれたのだと思う。

着てみると少し肩回りがブカブカするが、これくらいは許容範囲だ。

化粧品は、これまたどう見てもこのメイドの私物だった。

申し訳ないがすっぴんでいるわけにもいかないの、白粉と頬紅を少しだけ使わせてもらった。身支度をしている間に、メイドは朝食を運んできてくれた。

テーブルに並べられたのは、刻んだ野菜入りのオムレツ、ジャムが添えられた丸くて小さいパン、

葉野菜のサラダ、ポタージュスープ、食べやすいように切られたオレンジだった。

いい匂いが漂い、私のお腹がぐうと鳴りそうになる。

「お嬢様の好みが変わりませんかでしたので、一般的なメニューにあります」

「ありがとうございます。どれも美味しそうだわ」

きれいに盛りつけられた料理は、見た目通りとても美味しかった。

「この卵も野菜も、すぐく味が濃いわ。新鮮なだけでなくて、王都で手に入るものよりも質がいいのですね」

「ここは田舎ですから。食材はこの近辺で採れたものばかりなんですよ」

素直な感想を口にする、メイドが少し嬉しそうに返えてくれた。

食事が終わると、さてこれからどうしようとなった。

「辺境伯様と、これからのことをお話ししたいのだけ……お会いできるかしら？」

「旦那様は午前中に執務をなさいますので、午後からのほうが面会予約がとりやすいかと」

「そうなのね。なら、午後に予約をお願いできる？」

「かしこまりました」

そうなれば、午前中はすることがない。

どうしようかと思いつながら、ふと窓の外に目を向けた。

「お庭に出てみてもいいかしら」

屋敷の中を探検してみたいところではあるが、まだ私がここでどういう扱いになるかがはっきり

していない。

中途半端な部外者が歩き回るのは気が引ける。

だが、庭の散策くらいなら大丈夫だろうと思っただけだ。

きつと、王都にはない花や庭木もたくさんあるのではないだろうか。

「旦那様からは、自由にしていただくようにと仰せつかっております。ただし、私が傍に控えさせていただきます」

もちろん、拒否するつもりはない。

窓から見る限り、庭はとても広そうだし、この歳で迷子になるのは避けたい。

私はメイドに連れられ、屋敷の外に出た。

昨夜は暗かったからよく見えなかったが、外から屋敷を見ると古く重厚な造りだとわかる。

田舎で土地が広いからか、王都で私が住んでいたアシュビー侯爵家の屋敷より大きい。

マクドゥーガル辺境伯家も、ホールデン王国の建国時からの歴史ある家柄なのだ。

王都では、貴族の屋敷の庭には色とりどりの花が咲き誇っているのが普通だが、ここにはそういったものはなさそうだ。

その代わりに様々な種類の木がたくさん植えられていて、その間に小路が通してある。

小路に足を踏み入れ、水分を含んだ土の匂いがする爽やかな空気を胸いっぱい吸い込むと、森の中にいるような清々しい気持ちになった。

王都で生まれ育った私は、こんなにも豊かな自然に囲まれるのは初めてだ。

こうしているだけでも、マイナスイオンに癒やされるような気がする。
マイナスイオンというのは……ま、そんな説明はいいか。

それにしても、どこまでが庭なのだろうか？
このまま森に続いているのだろうか？

メイドも後ろをついて来ているし、小路から外れなければ大丈夫なはずだ。
気の向くままに歩いてく歩いていると、前方の茂みがガサガサと揺れた。

誰かいるのだろうか？

いや、どうやら人間ではなさそうだ。

ということは……と少し身構える私の前に、ひょこつと大きな獣が顔を出した。

白い首、金色の瞳、黒い前脚と大きな翼、茶色の下半身。

見覚えのあるグリフォンだ。

「……ロニー？」

「クエ」

教えてもらった名を呼ぶと、返事をしてくれた。

ロニーはのっそりと近寄ってきて、昨日と同じように私の匂いを嗅ぎ、縦ロールでなくなった金髪を軽く引っ張った。

長い金髪が珍しいのだろうか。

「昨日は乗せてくれてありがとうね。助かったわ」

「クエ」

グリフォンはとても知能が高いと本に書いてあった。

きっと、私が言っていることもきちんと伝わっているのだと思う。

明るいところで見ると、生命力に満ちた美しい生き物だということがよくわかる。

「柔らかそうな羽毛をしているのね。少し触ってみてもいいかしら？」

いいよ、というようにロニーは頭を差し出してきたので、そつとその白い羽毛に触れてみた。

「……すごい……最高の手触りだね」

侯爵家の令嬢で王太子殿下の婚約者だった私は、最高級の絹やベルベットでできたドレスをたくさん持っていた。

だが、そのどれもがロニーの羽毛の手触りには敵わない。

グリフォンの羽毛は、魔法具をつくるための貴重な素材でもある。

王都でも高値で取引されていることは知っていたが、こうして触れるのは初めてなのだ。

戦場では勇猛果敢で、敵を容赦なく爪や嘴で打ち倒すというグリフォンの羽毛が、こんなにも柔らかななんて。

しばらく撫でていると、ロニーは頭をぐいっと私の胸に押しつけてきた。そのままべたりと地面に伏せて、フワフワの頭を擦りつけるようにする。

どうやら、私に甘えているらしい。

可愛い。まるで大型犬みたいだ。

私は両腕で大きな頭を抱えるようにして、ついでに顔を羽毛に埋めてみた。
やっぱり、とても気持ちいい。

ロニーも気持ちいいのか、金色の瞳を細めた。

それがなんとも可愛くて、頬を緩めて撫でまわしていると、後ろから、低い男性の声がした。

「きみは……誰だ？」

振り返ると、辺境伯様が榛色の瞳を大きく見開いて私とロニーを見ていた。

「おはようございます、辺境伯様」

私はロニーから離れ、優雅にカーテシーをした。

「ま、まさか……きみは……」

「エメラインですわ」

にっこりと笑って見せると、彼は困惑の表情を浮かべた。

それも無理はないと思う。

「本当に、エメライン嬢なのか？ 声も、髪の色も、同じではあるが……」

「顔と印象が違う、とおっしゃりたいのでしょうか？」

彼は素直に頷いた。少し離れたところに控えているメイドも頷いた。

「辺境伯様とお話をしなくてはいけないことがたくさんございます。この容姿のことも、きちんとご説明いたしますので、お時間をいただけませんか？」

「ああ、もちろんだ。俺もきみとは話をしないといけないと思っていた」

私を気にかけてくれていたのね。

無理やり押し付けられた妻なのに、使用人任せにして放置するつもりではなかったようだ。

それだけでも、とても嬉しい。

「では早速、サロンに行こう。こういうことは早いほうがいい」

目の前に大きな手が差し出された。

「私は構いませんけど……辺境伯様は、お忙しいのではありませんか？」

「急ぎの仕事は昨日のうちに片づけた。今はきみの処遇をはっきりさせることが最優先だ。そうしないと、きみも落ち着かないだろう」

それはそうだ。

私だけでなく、マクドゥーガル辺境伯家の全員が落ち着かないと思う。

「お気遣いありがとうございます、辺境伯様」

私は頬を染めながら、褐色の大きな手に自分の手を重ねた。



陽当たりのいいサロンで、私と辺境伯様は向かい合ってカウチに座った。
メイドがお茶を淹れてくれて、昨夜も会った騎士が彼の背後に立った。きっと腹心の部下なのだろう。

「まずは、私の容姿について話をいたしましょうか。たぶん、一番気になっていらつしやるでしょうから」

辺境伯様が頷いたのを見て、私は語り始めた。

「ご存じのように、私は『茨姫』と呼ばれておりました。キツイ顔立ちで、王太子殿下の婚約者という立場を笠に着た傲慢な態度で、いつも偉そうに威張っていて、茨のように棘だらけだということからついた二三名です。昨夜の私をご覧になった時、まさにその通りだと思われたことでしょう」

これ見よがしな金髪縦ロール、吊り上がった目元を強調するような化粧、真っ赤な口紅、真っ赤なドレス。

刺々しさを前面に押し出した、それが私の標準装備だった。

だが、今は違う。

髪は緩やかなウェーブを描き、やや吊り上がり気味ではあるもののくつきり二重の目元。

最低限の薄化粧しかしていない顔は気が強そうに見えなくもないが、棘などないごく普通の女の子だ。

「あれは、私の仮の姿。今の私が、本来の私です。私は、敢えて『茨姫』に擬態ぎたいしていたのです」
全ての始まりは、私とアルバート殿下の婚約が結ばれた時だった。

当時五歳だった私は、可愛らしいドレスを着せられて彼と初めて対面した。

一つ年上のきれいな顔をした男の子にドキドキしながら、教えられた通りにカーテシーをした。

きつと優しく受け入れてくれると思っていたのに、残念ながらその期待は最悪の形で裏切られてしまった。

「別のに取り替えてくれ！ こんな意地悪そうな顔をした女は嫌だ！」

王子様の口から飛び出したとんでもない暴言に、私は傷つき泣き出した。

今ならいくらでも言い返すことができるが、当時は私もまだ子供だったのだ。

周囲の大人に宥められても、彼は頑かたなに嫌だと言いつづけた。

だからといって、私との婚約が取りやめになることはなかった。

嫌だ嫌だと騒ぐアルバート殿下と、わんわん泣く私を無視する形で婚約式は続行され、私たちは

正式に婚約者となった。

いくら顔がよくても、あからさまに私を嫌う相手を好きになどなるわけがない。

以来、私も彼が大嫌いになり、お互いにそれを隠すことすらしなかった。

それでも、婚約したのだからと私は月に二度は城に招かれ、二人だけのお茶会をさせられるようになったが、彼は毎回逃げ出すので、私は一人ぼつんと過ごしていた。

「そうか……それは、辛かっただろう」

「いいえ？ まったく辛くありませんでしたわ」

私は婚約者に見放され放置されていたわけだが、それはむしろ都合だった。

王家主催のお茶会だけあって、お茶もお菓子も絶品だったのだ。

私だって彼に会うのは嫌だったし、お茶会は私にとって一人で美味しいお茶とお菓子を堪能し、

ゆつくり読書ができる快適な時間となっていた。

そんなわけで、私はウキウキしながら登城していたのだが、それを表に出すことはなかった。いつも機嫌が悪くツンツンしていて、稀にアルバート殿下と会うと必ずチクリと嫌味を言う。彼もそれに嘯みついてきて、すぐに口論になる。

人目を憚らず、そうやっていつもいがみ合うものだから、私たちの仲が良好ではないことは有名だった。

国王陛下はたまに息子^{たな}を窘めていたようだが、そうすると必ず王妃殿下が庇うのだ。

シェリル王妃殿下は『傾国』と謳われたほどの美女で、国王陛下に強く望まれ妃となったそう。もうすぐ四十代になる今でもその美貌は欠片も衰えておらず、国王陛下の寵を一身に受け溺愛され続けている。

そのため、王妃殿下が出てくると国王陛下でもそれ以上何も言えず、周囲の大人たちも従うしかなくなってしまふのだ。

そんな王妃殿下は、一人息子であるアルバート殿下を溺愛している。

ほしがるものはなんでも与え、勉強や鍛錬から逃げて叱ることもない。

我儘もほぼ全て叶えて甘やかすものだから、アルバート殿下は容姿だけは立派に成長したが、中身はなんとも残念な仕上がりになってしまった。

それを嘆く声も多く上がっているが、彼には届いていない。

周囲にいる側近たちが、彼をチャホヤし甘い汁を吸うことだけに長けた無能集団だからだ。

そんな状況でも、国王陛下の唯一の子であるため、王太子としての彼の立場は揺るがない。

さらに、彼は下半身も奔放で、側妃にするからという言葉につられて純潔を捧げた下位貴族の令嬢は、私が把握しているだけでも十指に余る。

ケイロンの真似をして後宮を築くつもりなのか、と嘯かれていたくらいだ。

私にどうにかしろと言ってくる貴族もいたが、「これだけ嫌われているのに、私の言葉など聞いてくれるわけがない」と言うと、皆諦めた顔で引き下がったものだ。

「女性関係がだらしないのはどうでもよかったのですが、私が一番許せないのは、騎士を見下し軽んじることです」

彼についての苦手なことの中でも、私はそれが一番嫌だった。

美しく優雅なものだけが優れていると思っていて、そうでないものを酷く嫌うのだ。

内心でそう思っているだけならまだマシだが、それをわかりやすく態度に出す。

人として最低だと私は常々思っていた。

「泥や汗にまみれて鍛錬をし、戦場では血も浴びる騎士を汚いもの扱いするのです。私たちが安全に暮らしているのは、騎士たちのおかげだというのに、それが全く理解できていない。どうしても許せなくて、何度か苦言を呈したのですが、罵詈雑言^{ばりぞごん}が返ってきただけでしたわ」

私が溜息交じりに零すと、辺境伯様は顔を顰めた。

鉱山の所有権をめぐる西の隣国との国境で起きた先の戦役で、ホールデンが勝利することができたのは、辺境伯様が率いるグリフォン騎士団の働きによるもの大きいということは、平民の間で

すら一般常識だ。

それなのに、アルバート殿下はグリフォンを醜い獣だと公言し、褐色肌の偉丈夫である辺境伯様を野蠻だと特に嫌っている。

この方がほとんど王都に出てこないのは、それが理由でもあるのだろう。
「あんな救いようのない愚か者の妃になって、絶対になりたくありませんでした。どう考えても泥船ですもの。ですから、精一杯嫌われてあちらから婚約破棄をしてくれるように、『茨姫』に擬態していたのです」

「なるほど……そういうことだったのか」

どうやら納得してくれたようで、私は一安心した。

「きみも、苦勞したようだな」

「はい、それはもう！ 私ですが、私のメイドも苦勞していましたわ。毎朝髪を縦ロールにするのは、なかなか大変なのですよ。もう吊り目の厚化粧もしなくていいし、真っ赤な重たいドレスを着飾る必要ありません。とても清々しい気分ですわ」

本来の私は、今くらいの軽装が好みだ。

きれいなドレスや宝石が嫌いなわけではないが、別にならなくて平気なのだ。

「きみの家族は、擬態のことを知っているのか？」

「いいえ。このことを知っているのは、私のメイドと、ごく少数の親しい人たちだけです」

私の両親は絵に描いたような政略結婚だった。

母は私を生むと、もう義務は果たしたとばかりに別宅に移り住み、今でもそこで愛人と暮らしている。もう何年も顔も見えていない。

父は同じ屋敷で暮らしていたが、父の興味と関心は全て古書に向けられていて、最後に言葉を交わしたのがいつだったか覚えていないくらいだ。

私がアルバート殿下の婚約者選ばれたのも、彼がどれだけ嫌がっても婚約解消にならなかったのも両親が原因なのだと思う。

侯爵令嬢とはいえ、こんな両親なので、どれだけ私を粗略に扱っても文句を言ってくる者はいない。

将来的に私が妃になってからも、生家との繋がりが薄く立場が弱い私では、好き勝手するアルバート殿下を止められないだろうから、都合がいいというわけだ。

そんな私だが、意外にも殿下とその取り巻き以外からの嫌がらせは受けなかった。

特に王妃殿下は私からすれば姑になるわけで、嫌味くらい言われそうなものなのに、それも一切なかった。

むしろ、私への嫌がらせを妨害していたような気配すらあって、それならなぜ息子を注意しないのかと不思議に思っていた。

世にも美しい王妃殿下の胸の内は、私には想像もつかない。

それから、私には一歳年下の義弟ブライアンがいる。

最初は私に懐いて可愛かったのに、いつからかアルバート殿下の腰巾着になって私を罵るように

なった。

私に関するくないことを声高に喋り悪評を広めるものだから、私も全力でそれを利用させてもらった。

私が『茨姫』と呼ばれるようになったのは、ブライアンのおかげといっても過言ではない。そんな家族だから、私は一切愛着がないのだ。

「昨日の夜会で、アルバート殿下が私との婚約破棄を強行しようと画策していることは事前に情報を掴んでいました。捨てられて傷モノになった私には、普通に考えると修道院に行くくらいしか未来はありませんが、それは私の性に合いません。ですから、夜会のあとは家には帰らず、そのまま出奔する予定でした」

夜会に向かう前に、二度とアシユビー侯爵家には関わらないし、相続も放棄するという手紙を認め、私の籍を抜くための正式な書類も一式そろえて私室に残してきた。

これで家族とも家とも縁が切れたはずだ。

「出奔とは、随分と思い切りがいいな」

「もちろん、私一人ではありませんよ。私に長年仕えてくれているメイドと二人で王都を出るつもりで、準備万端整えていたのです」

「そうなのか？　なら、そのメイドは」

「今頃大急ぎでこちらに向かっているところでしょうね。問題が起きても臨機応変に対応できる優秀なメイドですので、心配はいりませんわ」

まさか私が辺境伯様と結婚させられ、そのままグリフォンに乗って飛び去ってしまうとは思っていなかっただろうが、あのメイドは私の趣味を熟知している。

『それ、なんてご褒美！』と叫びながら、アボットに向けて馬車を駆っているところだろう。

「きみの事情は、だいたいわかったと思う。それで、きみはこれからどうしたい？」

ここからが正念場だ。

私は気を引き締めて居住まいを正した。

「私は、このまま辺境伯様の妻としてここで暮らしたいと思っております」
せつかく初恋の君と結婚できたのだ。

離婚なんて望むわけがない。

「……本気で言っているのか」

「もちろんです。どちらにしろ、私たちはもう正式に結婚してしまっています。すぐに離婚というのも難しいでしょう。そんなことをしたら、またアルバート殿下に別の嫌がらせをするきっかけを与えることになるかもしれません」

離婚するとしたら、王都まで書類を提出しに行かなくてはいけないので、絶対にまた何かされるに決まっている。

あるいは、そうなると予想して、次の嫌がらせをするためにアルバート殿下たちが待ち構えている可能性もある。

「それもそうだが……」

辺境伯様は困惑顔で渋っている。

私のような女は、彼の好みではないのだろうか。

もしそうだとしても、ここで引くつもりなどない。

「では……とりあえず、お試しの結婚にいたしませんか？」

「お試しの結婚？」

「身一つでアボットに來た私を、放り出したりはなさいますんでしよう？」

「もちろんだ。そんなことはしない」

「王都からアボットまで、馬車だと少なくとも五日はかかります。私はメイドが到着するまでここにも行けません。それまでこのお屋敷でお世話になるわけですので、その間だけでも夫婦として過ごしてみませんか？　せつかく結ばれた縁ですもの、私は大切にしたいと思っていますのです」

彼の奥様は、数年前に病で亡くなったと聞いている。

まだ二十代後半の健康な男性なのだから、後妻を迎えるのはおかしいことではない。

私は、全力でその座に収まりにいくつもりだ。

眉を寄せたままの彼の背後に立つ騎士は、きらきらと輝く瞳を私に向けている。

きっと、私の申し出を歓迎してくれているのだろう。

辺境伯様は夜会で後妻はいらないと言っていたが、周囲の人たちは違う意見のようだ。

「お試しの結婚といっても……具体的に、どのようなことをしたいのだ」

「そうですね。夫婦になるのですから、食事はできるだけ一緒にいただくというのはどうでしょ

うか。それから、お時間があるようでしたら、お茶をしたりお出かけしたりもしてみたいですわ」

またロニーに乗せてくれたら嬉しいが、そこまで贅沢は言わない。

「お仕事の邪魔はいたしません。部外者に見られたくないもの、知られたくないことがあるのですしたら、そこに立ち入るような無粋なまねもいたしません。高価な宝石を強請^{ねだ}するようなこともいたしません。立場はわきまえておりますから、そこはご安心ください」

この辺りは、最初にはつきりと宣言しておかないといけないところだ。

私は我儘を言ったり傲慢にふるまったりして、周囲を困らせるつもりはない。

「そうした上で私との結婚を望まないとおっしゃるのであれば、メイドが到着したらすぐに出て行きます。その際、それまでに私にかかった費用はきちんとお支払いします。いかがでしょうか？」

この条件だと彼側に損はないはずだが、どうだろうか。

「旦那様」

口を開いたのは、意外にも壁際に控えていたメイドだった。

「願ってもないことです。ぜひお受けしましょう」

予想外のところからの援護射撃がきた。

「昨日からお世話をさせていただいておりますが、使用人の私に対しても丁寧^{ていねい}に接してくださいます。今までのお話から聡明な方であることは明らかですし、グリフォンを怖がることもなく、ロニーはすでに懐いている様子。マクドゥーガル辺境伯夫人に相応しいご令嬢だと思いますよ」

「だが、シーラ」

シーラというのが、彼女の名らしい。

私がどういう扱いになるのか不明だったから、まだ名を尋ねていなかったのだ。

四十代半ばだと思われるシーラは、おそらく辺境伯様が子供のころから仕えていて、だからこそ遠慮なくこんな意見を言える関係なのだろう。

「しばらく滞在していただくのはもう決まっているのです。これまで苦勞してこられたようですから、少しの間だけでもご希望通りにしてさしあげてもよろしいではありませんか。それに、若い令嬢がいるというだけで屋敷が明るくなります。私たち使用人も働きたいがあるというものです」

「旦那様、俺もそう思います。お受けしましょうよ！ こんなチャンス、二度とないですよ！」

ありがたいことに、辺境伯様の後ろの騎士もシーラに同調した。

これはいい流れだ。

私は期待をこめてじつと辺境伯様を見つめる。

「……わかった。お試しの結婚というのを、やってみようか」

三対一になった彼は、渋々といった様子ながらも頷いてくれた。

「ありがとうございます、辺境伯様」

私は飛び上がって喜びたいのを我慢するのに苦勞しながら、にっこりと笑って見せた。

話し合いが終わると、彼は仕事があるということで騎士を連れて去って行った。

喜色満面のシーラは商人を呼び寄せて、下着類や化粧品など私に必要な細々としたものを買いき

ろえてくれた。

私の着ているドレスは、彼の亡くなった奥様のものではなく、お母様のものだっただそうだ。

他にも数着残してあるから、ドレスを買う必要はないという。

私のメイドは荷物を満載した馬車でやってくるので、それまで持たせることができればいいのだ。

「ねえ、シーラ」

「はい、エメライン様。なんなりとお申し付けください」

ご機嫌なシーラに、私はにっこりと笑って告げた。

「私ね、辺境伯様にずっと憧れていたのよ。だから、辺境伯様と結婚できてとても嬉しいの。お試しの結婚ではなくて、ちゃんとした本物の夫婦になりたいと思っているわ。そうなるために、協力してくれないかしら」

「そのお言葉を待ってりました！」

シーラは一瞬瞳を大きく見開いたが、その直後に私の手をガシツと握った。

「全力で！ 協力させていただきます！」

シーラが協力してくれたら、百人力だ。

「ありがとう。それでね……今夜、辺境伯様に夜這いをかけようと思うのだけど」

私がそう言うと、シーラはたった一人でも私を胴上げしそうな勢いで喜んだのだった。

シーラの導きにより、私は辺境伯様の寝室に忍びこんだ。

そして私の全力の誘惑は成功し、寝台の上で私は彼に激しく口づけされている。

これが私のファーストキスなのだが、舌を絡めて吸われるのが気持ちよくて私は夢中になった。大きな手が私の体を這いまわる。

薄い寝衣の上から胸、腰、背、太腿とまさぐられて、私はくすぐったさとは違う感覚にぞくぞくとして小さく体を震わせた。

「……すまない、急ぎすぎたか」

辺境伯様はどうやら私が怯えているのだと勘違いしたらしく、私を暴く手が止まってしまった。「ああ、やめないで……もつと触ってください……」

私は涙目で訴えた。

昨夜、ロニーの上でマントに包まれた時、私は雌として目覚めた。

それまでの私は、成人してはいても子供だったと今ならわかる。

あれからずっと、彼がほしくてほしくてしかたがない。成熟した雌の本能が強い雄を求めているのだ。

私の願いは通じたらしく、私を見る榛色の瞳に獐猛^{じやうもう}な光が宿った。

寝衣の裾から大きな手が入りこみ、私の太腿に直接触れた。

その手は腰、胸、と素肌を撫でながら上にあがっていき、最後には邪魔な寝衣をすぽと脱がされた。

下着をつけていない私は、それで裸にされてしまった。

彼も前のボタンを全て外された寝衣の上を脱ぎ捨て、私を押し倒した。

再びキスで口を塞がれ、私は広い背中に腕を回して抱きつく。

「んっ……」

逞しい胸筋と私の胸の頂きが擦れて、舌を絡めながらも思わず声が漏れた。

それに気がついたのか、大きな手が私の左の胸を包みこみ、柔らかさを確かめるようにふにふにと揉んでから、硬くなった頂きを指先で弾いた。

「んんっ、んううっ……!!」

たったそれだけなのに、のけ反ってしまうくらい気持ちがいい。

「随分と感度がいいな」

欲情にまみれた低い声で囁かれると、腹の奥がきゅんとなる。

だが、私はいいやいやと首を振った。

「や……キス、やめないでえ……」

もつと舌を絡めたいと強請る私に、辺境伯様は舌なめずりをする狼のような顔で笑った。

「やめないよ。次は別のところにキスをしてあげよう」

その別なところというのは、私の右側の胸の頂きだった。

「あつ！ はあつ、あ、ふぁ……」

右側の頂きは舌先で転がされ、左側は指でかりかりと引っ搔くように刺激され、私は辺境伯様の短く刈られた黒い髪をかき回しながら声を上げた。

胸だけでこんなに気持ちがいいなんて、最後はどうなってしまうのだろう。

そう思うと少し怖い、それよりも期待の方がはるかに大きい。

ほしい。早くほしい。

この雄に食べられたい。

快楽で息が乱れた私の上から、辺境伯様は体を起こした。

そして、私の両膝の下に手をいれて、ぐいっと左右に開いた。

すっかり濡れた秘部を榛色の腫に凝視され、さすがの私も赤くなった。

長い指がそこに触れると、私の体はまた震えた。

「こんなに、濡れているのか……」

「だって、気持ちよくて……んんっ！」

指が膣内に差し込まれ、私はまた声をあげた。

自分でも触れたことがないところに、彼が触れている。

ゆっくりと探るように指を動かしたところで、彼が凛々しい形をした眉根をぐっと寄せた。

「きみは……もしかして、処女なのか？」

蕩けていた私の意識も、これにははつきりと覚醒した。

「あ、当たり前ではありませんか！ 私をなんだと思っているのです!?」

「いや、俺はてつきり」

「私は、昨日までアルバート殿下の婚約者だったのですよ!? 男遊びなどできるわけがないではありませんか！ もちろん、アルバート殿下にも手出しはさせませんでした。私は正真正銘、純潔なのです！」

一度だけ、アルバート殿下に寝所に引きずりこまれそうになったことがある。

私のことは嫌いでも、私の豊かな胸は嫌いではないとか何とか言っていた。

もちろん私は全力で逃げたので未遂に終わったのだが、今思い出しても腹が立つ出来事だった。

あれからさらに私たちの仲は悪くなり、彼は見せつけるように多くの女性と関係を持つようになったのだった。

「今までにたくさんさんの男性に会いました。その中で、抱かれたと思ったのは、辺境伯様だけです。信じてくださいますか？」

私に下心を持って近づくと男性は掃いて捨てるほどいた。

『茨姫』を誰が落とすかという賭けが、一部の男性たちの間で行われていたのも知っている。

もちろん悪い人ばかりではなく、いい人だった。

だがそれでも、私がときめいたのは辺境伯様に対してだけだ。

「エメライン嬢」

榛色の腫がこれまでとは違う強い光を宿し、私をひたと見つめた。